

ばく りゅう
麦粒

2023. Spring

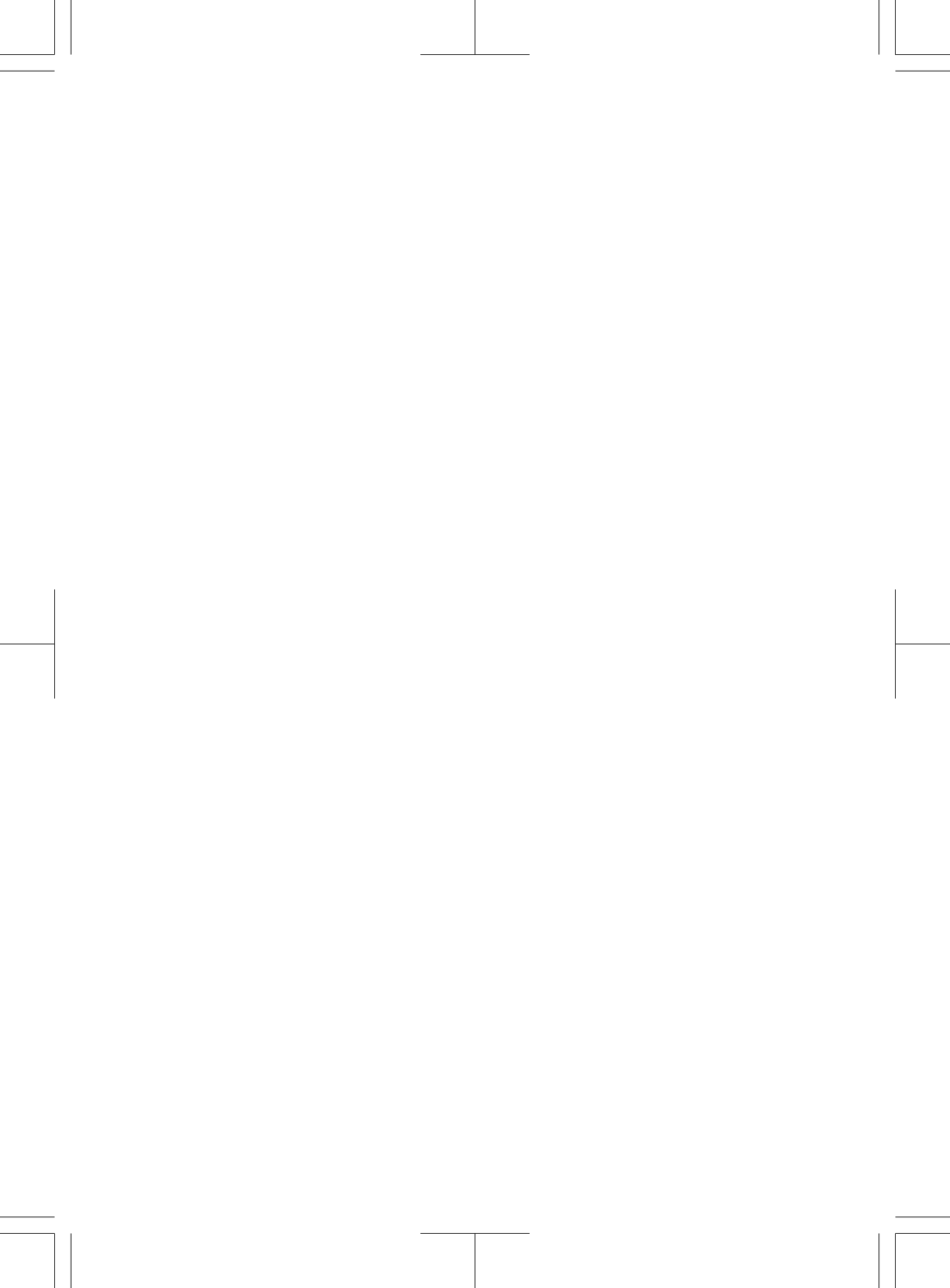
麦粒／NO. 141

発行・キリスト教センター

目 次

時	森 ゆみ子 (3)
差別と偏見はなぜ生まれるか?	金 愛 慶 (7)
改革、自由、責任	徳 弘 浩 隆 (11)
新入生の皆さんへ	(17)





時

森 ゆみ子

天の下では、すべてに時機があり
すべての出来事に時がある。
生まれるに時があり、死ぬに時がある。
植えるに時があり、抜くに時がある。
殺すに時があり、癒やすに時がある。
壊すに時があり、建てるに時がある。
泣くに時があり、笑うに時がある。
嘆くに時があり、踊るに時がある。
石を投げるに時があり、石を集めるに時がある。
抱くに時があり、ほどくに時がある。
求めるに時があり、失うに時がある。
保つに時があり、放つに時がある。
裂くに時があり、縫うに時がある。
黙すに時があり、語るに時がある。
愛するに時があり、憎むに時がある。
戦いの時があり、平和の時がある。

(旧約聖書 コヘレトの言葉 3章1～8節)

先ほどの聖書のお話は、時についてで した。“すべてに時機がありすべての出 来事に時がある”。私はこれを、「潮時」 と理解しました。「潮時」という言葉か ら何事にもちょうどよい時というものがあるのだと思います。いいことばかりで	はなく、良くないと感じられることも、 後から考えるとその時に意味があるのだ と思っています。そして、それは縁で自 分につながったものだし、運で授かった もの巡ってきたものだと思います。 自分に縁がなかったり授かっていないも
--	--

のは、どんなに欲しくても手に入らないのです。巡り合わないのです。この大学にいる人も、ここと縁がつながっていたのだし、この大学が自分に授かったものだから巡り合ったのです。それを運命という言い方をすることもあります。でも、若い時はそう言われても素直に呑み込めないんじゃないでしょうか？こんな私も、若いころは「これが運命だと言われるなら自分で変えてやる」と思っていたときもありました。「潮時」なんて自分が作ればいいと思っていましたが、いつからか物事は、成るように成るし、成るようにしか成らないと思うように変わりました。それに気づいたとき、それが年を重ねるといことなのかなと思っています。

同じような意味で、「賽を投げてみる」という心境にもなります。昔々、カエサルが言った「賽は投げられた」という言葉ほど強い意味のものではないのですが、自分で決めかねることや、自分一人の力では何ともならないことに出会ってしまったとき、この心境になります。今の自分でやれることをやってしまったら、後は運を天に任せるという気持ちです。でも、こう考えるだけでずいぶん気持ちは楽になります。「賽を投げて、潮時を待つ」。

自分の力では、何ともならないことはこう考えるしかないかなと思っています。

ここに来る前の私は、高校で働いていました。高校には何年か毎に異動、いわゆる転勤があります。希望は出せるのですが、私がA校に行きたいと希望すれば、A校の誰かがA校から出なくてはいけない。つまり相手のあることでもあり、その通りになる保証はありません。逆にずっとこの学校にいたいと願っても、叶わないこともあります。残りたくても異動希望先は書かなくてはいけない、どちらであっても希望を書いた用紙は出さないといけないルールでした。だから、異動希望の紙を出した後はいつも心の中で、投げた賽が新しい世界を広げてくれると信じて「賽を投げた」と思っていました。賽を投げるには、自分はここからどうしていくんだろうと客観視する自分がいないとだめだし、相手に任せるといことだから、当然、出てきた結果は受け入れなくてはいけない。それができないときは、賽は投げられないし、投げてもう1回、もう1回と思ってしまう。自分では気づいていない、もしかしたら認められない、認めたくないけれど、本当はこうしたいという気持ちがあるのかなと自分自身に問いかけてみます。

時には、自分の気持ちと向き合う時間も必要だと考えます。誰でも、気づきたくない、認めたくない、知りたくない気持ちは持っていると思います。そのままでも何とか過ごせるなら、そのままにしておけばいいと思います。そうでないなら、それとうまく折り合えるようになる方法が必要なんじゃないでしょうか。自分と向き合うことや1人で考えるのが難しい時、学生相談室に来てください。一緒にその方法を考えてみましょうか。自分のことをゆっくり考えてみるのができるのも、大学生だからだと思います。

時を時間と捉えると、時間が止まらないものであるというのはみな同じです。どんな時間もそれがずっと続くことはありません。楽しくてもうれしくても、悲しくても辛くても、同じ時間はずっとは続きません。なぜ続かないか。時間が止まらないものであるからじゃないでしょうか。中島みゆきの「時代」という歌をご存じですか？中島みゆきは、「今はこんなに悲しくて、涙も枯れ果てて、もう二度と笑顔にはなれそうもないけど。そんな時代もあったねといつか話せる日が来るわ。あんな時代もあったねときっと笑って話せるわ」と歌い、さらにこう続けています。「だから今日はくよくよし

ないで今日の風に吹かれましょう」。「今日の風に吹かれる」というのは、先ほどの「賽を投げて、潮時を待つ」ということに近いかなと私は思っています。そしてこの年になると、この歌の歌詞をその通りだと思います。若い時、永遠に終わらないと思うくらい悲しかったり辛かったりするの、まだ、感性が研ぎ澄まされて鋭いからだし、そんな目にあったことがあまりないからじゃないでしょうか。些細なことにでも引っかかるし、傷ついてしまうのは、自分の気持ちに鋭敏だからじゃないでしょうか。だから、もう立ち直れないと思うくらい全てが悲しくて辛くなって、ここから抜け出すことなんてできないような気持ちになってしまうんじゃないかなと今は思います。でも、時間は流れていて止まらないから、気持ちはずっと同じではいけないのです。あんなに悲しくて辛いと思っていた気持ちも、一晩一晩、時間を重ねていくと、少しずつではあるけれど、変わっていくんだと思います。ただ、少しずつと言った時間は、人によって違いますし、出来事によっても違ってきます。重ねる時間は人によって長短の違いはあるけど、いつかはその気持ちと折り合えるようになる日が来ると私は思います。時間を戻すこ

とはできないから、あったことをなくすことはできません。でも、いつか思い出に変わります。「そんなことあったね」とか、「そうだったっけ」と話す日は来ると信じます。それでいいのです。時間は優しいのです。だから、生きていけるのだと私は思います。

今、1人ではどうしていいかわからない気持ちを抱えている人。もし、よろしければ学生相談室に話しに来ませんか。自分以外の人に自分の思いを話してみると、違った視点が見えてくるかもしれません。そして、誰かと話すということは、頭の中にある自分の思いを言葉にすることです。頭の中にある自分の思いは、出口が見つからなくて、ぐるぐる回っているだけで嫌になってしまいます。でも、自分の思いは言葉になると、違った顔を見せます。自分で気づくことがあります。ただ、自分の思いを言葉にするのには、

時間が必要です。だからまだ、自分の思いを言葉にする気になれなくて、誰かと話すことができないときは、紙に書いて文字にしてみてください。自分の思いの違った顔を文字も見せてくれます。

入試でいくつも大学を受験した人もいます。その中から、縁があって名古屋学院大学に来たのです。この大学と何年の縁かは、人それぞれです。今まで、この縁に納得できていなければ、違う縁を探してみてください。見つければいいし、見つからなければ、ここでここに来た意味を探してください。何かあなたにとって得るものがあるから、ここにたどり着いて、ここに来ているのだと私は思います。どうか、ここでの学生生活が自分にとって意味のあるものになりますように。そのために、学生相談室も活用してください。そのお手伝いができるといいなと思います。

(もり ゆみこ 学生相談室 カウンセラー 2022.5.3 チャペルアワー奨励)

差別と偏見はなぜ生まれるか？

金 愛 慶

愚か者の前から立ち去るがよい。

彼に知識ある唇を認めることはできない。

思慮深い人は自分の知恵によって道を見分ける。

愚か者の無知は欺く。

(旧約聖書 箴言 14章7～8節)

近頃テレビやネット上で同性婚をめぐる法的差別やその改善を求める訴訟が日本各地で起きており、その関連ニュースや記事の中にLGBTQ+という性的少数者を表す言葉がよく登場します。LGBTQ+は、生物学的性（sex）の少数者を意味する用語ではなく、自分のパートナーに対する性的指向性、あるいは自分のジェンダーに対する性自認において少数派に属する人々を意味します。

ジェンダー（gender）とは、社会・文化的性とも言いますが、社会が規定する男女の行動様式や男女の違いについて定める規範などを含む性別を意味し、生物学的性と区別して使う用語です。私たちは、出生時から男女のどちらかの生物学的性で住民登録され、その登録された性別に合う社会的行動様式を身に着ける

ように求められて育ちます。これを性の型づけ（sex-typing）といいますが、多くの人の場合出生時に登録した性別と符合するジェンダーの行動様式を成長過程の中で学習し、取り入れることによって性同一性（gender-identity）を形成していきます。

ところが、性的少数者たちはその過程において違和感を覚え、自身の生物学的性とジェンダーが一致しない感覚に自らも困惑し、葛藤を経験しながら生きています。こうした個人的な性的指向性や性自認における悩みや苦しみだけでなく、男女という二項対立的な社会的制度やシステムの中でしばしば排除されるという差別にも苦しんでいます。同性婚が認められていない日本においては、同性カップルは配偶者としての様々な法的権利が

得られない状態に置かれていることがその一例です。

私が初めてトランスジェンダーと推測される人に遭遇したのは、35年以上前の大学1年生の時でした。ある日、街を歩いていたら、うつむきで歩いて来る人がいて、服装や化粧をしていることから最初は女性だと思ったのです。しかし、よく見ると長身で骨ばっている男性の体格をしていて、化粧も女装もどこかぎこちなく、奇妙な感じを覚えました。その当時はジェンダーとかLGBTQ+という言葉すらあまり知られていない時代で、周囲を歩いていた他の通行人たちも彼女に対して好奇の視線を隠しきれず、じろじろ見たり振り向いたりしていたのです。1980年代の中頃から、世界的に有名な俳優やロック歌手などが同性愛者でHIVに感染していることが報じられ、同性愛を含む性的少数者に対するネガティブなイメージが広まり、差別的な見方や偏見が蔓延していました。

外界からのあらゆる情報を処理する際に、人は自分の従来の知識や価値観といった認知的枠組みに照らし合わせて情報を理解・解釈・判断しようとしています。その際によく知らない、あるいはそれまで知っていた情報と異質な情報に遭遇すると認

知的混乱を引き起こし、当惑や不安を覚えます。これを心理学者フェスティンガーは認知的不協和の状態と呼びました。初めて性的少数者と遭遇した当時の私は、まさに認知的不協和による当惑状態だったと言えます。

一般に、外部からインプットされる情報が従来の知識や価値観と大きくずれるほど、また自分にとって重要で中心的な知識や価値観と異なるほど、我々にはより強い不安が引き起されます。そして、その不安を解消するために、時には相手を無視・拒否・排除し、もっと行けば避難や不利益を課すなどの差別を動機づけたりもするのです。

差別と偏見はなぜ生まれるか？様々な原因はありますが、差別や偏見の対象への我々の無知から起因することが多いです。しかも、「無知による差別と偏見」は、加害者側が自身の無知を自覚できないことから差別される側により大きな傷を与えてしまう、実に厄介なことだと言わざるを得ません。

皆さんは、人の髪の色は何種類存在すると思いますか？黒髪・茶髪・赤髪・金髪などを色々あるでしょうと答えるはズです。髪の毛の色は、メラニン色素をどの程度含んでいるかによって発色が異

なって見える訳で、金髪だけでもプラチナブロンド（白に近い金髪）、サンディブロンド（砂のような色の金髪）、アッシュブロンド（灰色かかった金髪）など多様な色が存在します。

それでは、改めて世の中に生物学的性（sex）はいくつ存在すると思いますか？ 実は、毛髪の色と同様に生物学的性には様々なタイプが存在することを皆さんは知っていましたか？生物学的性とは、①性染色体（XXかXY）に加えて、②内・外部の生殖器官の解剖学的形状のほかに、③性ステロイドホルモン（男性ホルモン、女性ホルモン）のレベルなど組み合わせた性別タイプを指す概念です。遺伝学の基礎研究が進んだことによって生物学的性は数多く存在することが判明しており、二項対立的な枠組みだけで性を捉え切れないことが分かってきました。生物学的性には、典型的男性型と典型的女性型の間に連続する表現型としての多様なタイプが存在し、より男性的タイプかより女性的タイプかという「性スペクトラム」の考え方で性別をとらえることが実態に即しています。全体から見れば少数になるものの、多様な生物学的性をもつ人は、数千人に1人の割合で生まれるとされています。

このように、性別に関する遺伝学的な基礎研究知見が学術の領域では次々と発表されているにも関わらず、多様な性別の存在については公に語られることは少なく、従来の二項対立的な性別の捉え方は、日本の法的制度や社会システム全般に深く根付いています。ここ数年、人権を尊重する先進諸外国の法的・制度的変化を受けて、日本社会も性的少数者への理解が進んできており、同性カップルやLGBTQ+の人々の悩みに関する報道も増えてきました。けれど、依然としてLGBTQ+の理解に必要な情報が十分に発信されているとは言えず、社会制度の中で受けている数々の差別についての発信も十分とは言えません。

家族法による婚姻制度一つにしても、保守的な考え方を持つ人は、同性婚を認めたら家族の在り方が崩壊し、社会システムがおかしくなるのではないかという不安を示します。人が偏見と差別から自由になることはなかなか難しいのも事実です。誰しも馴染みのないものや新たな試みの際に起きる不安から抵抗しようとするでしょう。しかしながら、自分の無知によって意図せずに他者に対する偏見を持ち差別することにならないためには、常に自分の知識の限界や無知

に対する戒めの心を持つことが大切ではないでしょうか。

性的少数者のことだけに限らず、自分の無知によって偏見や差別を犯さないためには、既存の知識や価値観に囚われ過ぎず、オープンマインドの精神をもって自分の無知を減らす努力をする必要があ

るのではないのでしょうか？成熟した社会とはまさにその構成員の多様性に対する理解を深めようと積極的に取り組む社会であり、偏見や差別を減らして共に生きるために努力する社会ではないかと思います。

(きむ えきょん スポーツ健康学部教授 2022.6.17 チャペルアワー奨励)

改革、自由、責任

徳 弘 浩 隆

イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「私の言葉にとどまるならば、あなたがたは本当に私の弟子である。あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする。」彼らは言った。「私たちはアブラハムの子孫です。今まで誰かの奴隷になったことはありません。『あなたがたは自由になる』とどうして言われるのですか。」イエスはお答えになった。「よくよく言うておく。罪を犯す者は誰でも罪の奴隷である。奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。だから、もし子があなたがたを自由にすれば、あなたがたは本当に自由になる。

(新約聖書：ヨハネによる福音書 8章31～36節)

と一緒に神様の声を聴いていきたいと思えます。

私はルーテル教会の牧師の徳弘といいます。なぜ私が呼ばれたかといいますと、宗教改革記念日と関係があります。皆さん世界史で習ったと思いますが、宗教改革について覚えているでしょうか。「ルーテル教会ってなんですか」ときかれることがよくあります。ルーテル教というキリスト教とは別の宗教のように思われて困ることもあります。宗教改革は1517年にありました。マルティン・ルターが、当時の誤った方向に流れていたカトリッ

クの教会と議論をしようと思ったら、対決になってしまって、破門されてしまった、ということが起こりました。それでプロテスタントという新しい教会ができました。protest (抗議)、したからプロテスタントと呼ばれることになりました。何をプロテストしたかということ、当時の教会のあり方が間違っている、と修士であり大学教授だったルターが教会で議論しようとしたわけです。結果、それまでとは違う教会ができていった。それで私たちは本当の自由を得ることができた、と思っています。だから今日の奨励

題がちょっと難しく堅苦しいですが、「改革、自由、責任」そういう題をつけってみました。私は堅苦しいことが嫌いですし、型通りのことができない変わった牧師です。皆さんはどうですか。大学でキリスト教が必修科目であって、ちょっと難しいなとか、面倒くさいなとか、思うことはありませんか。それはそれで正直に言われたらいいと思います。その上で今の自分と何の関係があるか、自分にどんな意味があるのか、それを一所懸命に考えていくことが大事だと思います。難しい、面倒くさい話を聞いて、ただ嘆いてテストを受けるよりも、何の意味があって、自分にどんな意味があるのかよく考えてみて欲しいと思います。私は型通りのことがあまりできませんが、私が思ったこと、あるいは体験してきたことを少し紹介して、皆さんがこれから生きていく上で、何かの参考になればと、今日はそんな奨励の時間ということにさせていただきます。

さて、宗教改革で、なんの改革があったかということです。当時のカトリック教会は人間を生まれてから死ぬまで全てケアをして大事にしていたのですが、お金や権力が絡んでくると、人間は教会といえども間違いを犯すことがあるんです。

キリスト教会は何の間違いもなく素晴らしいことをしてきたと聞くかもしれませんが、私はそうは思わないです。キリスト教会はたくさん間違いを犯してきましたし、失敗もしてきたと思います。その中の一つが16世紀にもありました。死んだ後、地獄に行かなくてもいいように、教会で一所懸命懺悔をして赦してもらう、だから教会から離れることができない。そういう状況でした。そして死ぬ瞬間まで、最期の瞬間まで懺悔をして神父さんに祈ってもらわないと自分は天国に行けない。地獄か煉獄という苦しいところに行かされる。そんな風に思っていたと言っているでしょう。教会に行けばいろんなことが聞けるから勉強できると思うでしょう。だけど、当時の教会はラテン語でミサをしていました。どこの国でもですよ。今、皆さんは聖書を読むことを勧められたりするかもしれませんが、聖書は日本語で当たり前、あるいは日本の国籍でない方もいらっしゃるかもしれませんが、自分の国の言葉で読む聖書が当たり前と思うでしょうけれど、当時の聖書は、オリジナルはヘブライ語とギリシャ語で、朗読はラテン語という具合でした。聖書を翻訳することは罪にあたるとして、火あぶりにされ殺された

人もいました。だから教会に行っても、今日は私、普通に日本語で奨励をしていますが、昔の時代はドイツの人でもフランスの人でもスペインの人でもイギリスの人でも、ミサはラテン語だし、前で行われている儀式は自分たちには理解できない言葉で行われていました。聖書を読んでもギリシャ語だから普通の人にはわかりません。それどころか自分の国の言葉も読み書きできない人が多かった時代です。そんな時代に私たちの心も魂も全て面倒をみてくれていたのが教会ですが、お金や権力が絡んでくると、これを買ったら救われるよとか、ここに寄進したらあなたの死んだお母さんは天国に行けるよ、そんな時代があったわけです。そこでマルティン・ルターというドイツの修士がおかしいんじゃないですか、という議論をはじめた。そうしたら破門になって追い出されてしまったというのが、プロテスタントそしてルーテル教会の始まりということです。

さて、私はここで自由を得たと今日の聖書の言葉にもありますが、皆さん自由ですか。自分は自由に、思い通りに生きている。将来に何の不安もない。大丈夫だと思っている人もいるでしょう。だけど、生きるのが面倒くさいな、生きにく

いと感じませんか。私は高校のころ、ちょっと学校がつまらなくなっていて、学校に行っていない時期が少しありました。留年するほどではなかったけれど、高校に行ってもつまらないと、家で勉強していました。学校に行っている連中よりよっぽど自分の方が成績がいいぞと偉そうに思っている時もありました。大学に入りましたが途中でつまらなくなっていて、そこも辞めました。いろいろと挫折をしたり失敗をしたり、そんな人生でした。私は生きるのが面倒くさい、大変、そんな生き難さを感じる人の気持ちがわかる気がします。自分の苦しさとか、生きるのが難しいと思うこととか、友達関係の面倒くささとか、自己嫌悪とか人間不信とか、そういうのを自分は体験してきました。そして最後はルーテル教会という今の自分の教会に行き、人間には罪があって不完全なんだと無理しなくてもいいよ、あなたはあなたのままでいいよ、というメッセージを聖書から、教会から聞いた気がします。それで私は肩の荷をおろしたと、いいですか、楽になった気がしました。競争したり意地悪をしたり、駆け引きをしたり、そんなことが皆さんも時々ないですか。本当の自分の生き方を貫いたら仲間外れにされる。みんなと合わせてい

ないとうまくやれないからと嫌々やることが私はありました。そんな不自由さから本当の自由をもらえる。そういうのが聖書に書いてあるイエス・キリストの教えだと思います。

私はブラジルに10年いました。宣教師という仕事で、ブラジルで日本人、日系人のお世話をして、ブラジルにいるブラジル人のお世話をしました。それからスラム街で貧乏している人たちと一緒に生きていました。彼らに英語を教えたり、コンピュータを教えたり、私の妻は音楽を教えたり、子どもたちが非行に走らないように教えてきました。私はイエス・キリストによって自分の自由をもらったと思っているけれど、ブラジルに行き思ったのは、もっとみんな自分に自由に生きている、ということでした。こどもたちに会ってとっても考えさせられました。日本だとどうですか。あまり日本のこと悪くいっちゃいけないんだけど、皆同じルールがあって、ルールが決まっていて、それから外れたら悪く言われて嫌でも合わせるというような同調圧力というものでしょうか、何か一緒にしていないとまずい気がします。だけどブラジルはラテン系で、自由ですね。自由すぎて時々嫌になるぐらいです。もっと自由に、

もっと自分たちの思うように生きていい、そういう聖書の教えに触れた私は、ブラジルに行ってもう一つ教えられたことがあります。みんなの顔色をみなくていい、自分が生きたいように生きたらいい。失敗してもやりなおせばいい、みんな友達で仲良く泣いたり笑ったりしたらいい。そういう文化はブラジルの方が強いんです。嫌なこともあります。強盗にあたり盗まれたりすることもあります。けれど、私たちは自分の世界や自分の社会を絶対化しないで、もっといろんなことを考えていいと思います。皆さん将来何になりたいでしょうか。いろんな夢があるでしょう。それに向けて、自分の今の生き方をもっと客観的に、広く見たらいいなと思いました。

さて、自由になるのはいいんだけど、なんでも勝手にいいかということを考えてないといけません。自由という漢字はどういう漢字でしょうか。私は日本に帰ってきてから外国人に日本語を教えたり、通訳をしたり、外国人のお世話をしたりしています。日本語を教えるようになって、日本語の意味をもっとわかるようになったと思います。自由という漢字は、自分の自、理由の由、つまり自由というのは自分を理由にする生き方です。それ

は何かに抑圧されたり支配されたりしていない、自分で考えて自分で生きていい、自分を理由にして生きていい、それが自由です。だから奴隷、差別、苦しみに支配されていない、自由な生き方ができる、というのが聖書の教えです。だけど自由だからなんでもしていいと思うと大きな間違いが起こります。自由には責任も伴うということを考えないといけません。私たち人間は自分が一番かわいいから、つい人を押しのけてでもというエゴイズム、自己中心的になります。だから人を苦しめたり、人から奪ったりすることもあるわけです。今、どうですか。病気と戦争で世の中生きにくくなっています。戦争は昔の、教科書の出来事かと思っていたら、ニュースを見るたびにカラーで、映像で戦争が報道されて私はびっくりします。自由、平和、それはお互い主張が違うとぶつかり合うから、相手を排除しなくてはいけなくなる、私たちは自由に生きていいんだけど、どうしたらいいのか。その答えが聖書にあるイエス・キリストの教えです。みなさん名古屋学院大学の建学の精神を覚えていますか。神を敬い、人を愛す、ですね。これが本当に旧約聖書、新約聖書に一貫している教えです。イエス・キリストもそれを貫徹さ

れました。神を大事にする、人を愛する、同胞や兄弟を愛する、そして自分の国にいる外国人を愛する、そうしていけば、自分を通すために人を押しのけて悲劇や苦しみがある社会じゃなくなるよ、ということです。私たちはそれができません。ただイエス・キリストはそれを通していかれる。仲間や外国人を愛するだけではなくて、敵をも愛するんですね。それがイエス・キリストの生き方、そして死に方でした。嘘はなかった、本当に敵を愛しながら死んでいった、それで私たちの目が覚めた、というのがクリスチャンの姿です。自分にも罪がある、私はまだ人を殺したことはないけれども、けど心の中で愛せない人がいる、ちょっと無視してやろうかなとか、今日は会いたくないなって気持ちはあるでしょう。それは人を殺したのと同じですよ。イエスはそう言うんです。じゃあ自分は今まで心の中で何人殺したんだろうか。そんなことを思うと、自由勝手に生きていいのではない、そこには責任がある。どうしたらいいか、神様の言葉、聖書に書いてあるのは神を愛して人を愛することです。それをみなさんの大学は大事にしている。いつも聞いていることかもしれないけれど、そんな違った読み方でみてもらえれ

ばいいと思います。

私はブラジル、サッカーの国、スポーツや音楽が盛んな国、いろんなところで、いろんな人と出会って、一緒に笑ったり泣いたりしてとっても豊かな人生を送れて感謝しています。皆さんも、もっと今の自分の生き方とか社会とか、常識を疑ってみると、もっといいものになる、本当に平和な社会、生き方ができるように、挑戦してみたらいいと思います。私も40歳を過ぎて外国に行って10年、帰ってきて4年目でまだカルチャーショックがあります。最近の日本のことがよくわからないこともあります。でもそんなチャレンジがあると自分の生き方が豊かになります。だから皆さんもどうぞ、ありきたりのレールの通りの生き方ではなくて、いろんなことに挑戦したらいいと思います。そしてそれが自分を、あるいは他の人を幸せにする道になるということを知って欲しいと思います。今までの常識をひっくり返したのがマルティン・ルターという宗教改革者でした。でもそれは彼が発見し、彼が言い出した専売特許ではなく

て、聖書の中のパウロという人が書いたことです。パウロはイエス・キリストの生き方を説明しました。ルターはそこに立ち戻って、その当時の常識をひっくり返したということです。私もまだいろいろやりたいことがたくさんあります。皆さんも若いから、もっといろんなことを学んで挑戦して、失敗してもいいし、いろんなことをやったらいいと思います。それは自由なんです。だけど自由には責任があります。だから神様を敬うことと人を愛するということ、それを忘れないで一緒に生きていきましょう。今日は宗教改革記念日、私はルーテル教会の牧師です、ここには日本基督教団の牧師やカトリックの方もおられ、この大学のもう一つのチャペルでは聖公会の先生が奨励をされたということです。私たちの教派は、昔は大ゲンカして戦争もありましたが今は仲良く一緒に仕事をしています。どうぞみなさんこれからも神様の言葉を学んで、そして自分の人生にどういう意味があるか、それを考えて生きてください。そんなお勧めでした。

(とくひろ ひろたか 日本福音ルーテル高蔵寺教会・復活教会・掛川菊川教会・新霊山教会 牧師 2022.10.28 エキュメニカルチャペルアワー奨励)

新 入 生 の 皆 さ ん へ

敬 神 愛 人



(創立者 F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。」
イエスは言われた。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが
最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じよう
に重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』
(新約聖書 マタイによる福音書 22 章 36～39 節)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これから皆さんは、
この名古屋学院大学でのキャンパスライフを過ごしていくことになり
ます。その上で、この大学の一員となった皆さんにぜひ知っておいてい
ただきたいことを簡単にお伝えしたいと思います。

☆

私立の学校には、独自の理念、「建学の精神」というものがあります。
名古屋学院大学の建学の精神は「敬神愛人」です。これは、キリスト教
の聖典である「聖書」の言葉に由来しています。

敬神 … 神を愛し敬うこと。

愛人 … “隣人”を自分のように愛すること。

イエス・キリストは、この二つを大切にしなければならないと人々に
教えました。隣人とは、近しい人だけでなく自分以外のすべての人を指
すと理解されます。神は私たちを愛してくださっています。その愛をも
って、私たちは神を愛し敬い、また隣人愛として他者のためにも愛を向
けていく。これを本学の教育の基本にしているのです。

☆

1883 年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン (F. C. Klein) という宣教師が、キリスト教の伝道と英語教育を目的として来日しました。彼は、横浜に英語学校や教会を設立し、1887 年、次の着任地として妻メアリーとともに名古屋にやってきました。彼らは、名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたと伝えられています。その時、クラインがその教育の基本理念として掲げたのが、「敬神愛人」だったのです。

「名古屋英和学校」と名づけられた彼らの学校は、1951 年、「学校法人 名古屋学院」と名称を改め、そして 1964 年、わたしたちの名古屋学院大学が誕生することとなります。

☆

新入生の皆さんは、これから数年の間、本学の学生として様々なことを学んでいくことになりますが、勉学や研究、課外活動に勤しむのと同時に、本学の建学の精神「敬神愛人」という言葉を心に留めつつ、人間的に成長していくこともぜひ目標にしてください。

皆さんが、自分自身のことも大切にしつつ、他者を愛していくことができますように…。また、人間同士のかかわりだけでなく、人知を超えた存在に心を向けられるような謙虚で広い視野を持った人間性が、この大学でのキャンパスライフを通して養われていきますように…。

◆ チャペルへの招き ◆

各キャンパスに設置されている「チャペル（礼拝堂）」では、毎週、「チャペルアワー」というキリスト教の礼拝を行っています。聖書の御言葉と祈りを中心に、教職員や近郊の牧師さんたちによる奨励を聴くひと時です。チャペルアワーを通じて、世界の大きな文化の源流の一つである「キリスト教」という宗教の教えに触れ、これからの時代を生きていく上で大切な何かを感じていただければと考えています。

＜名古屋キャンパス

しろとりチャペル＞ 火曜日 13：00～13：30

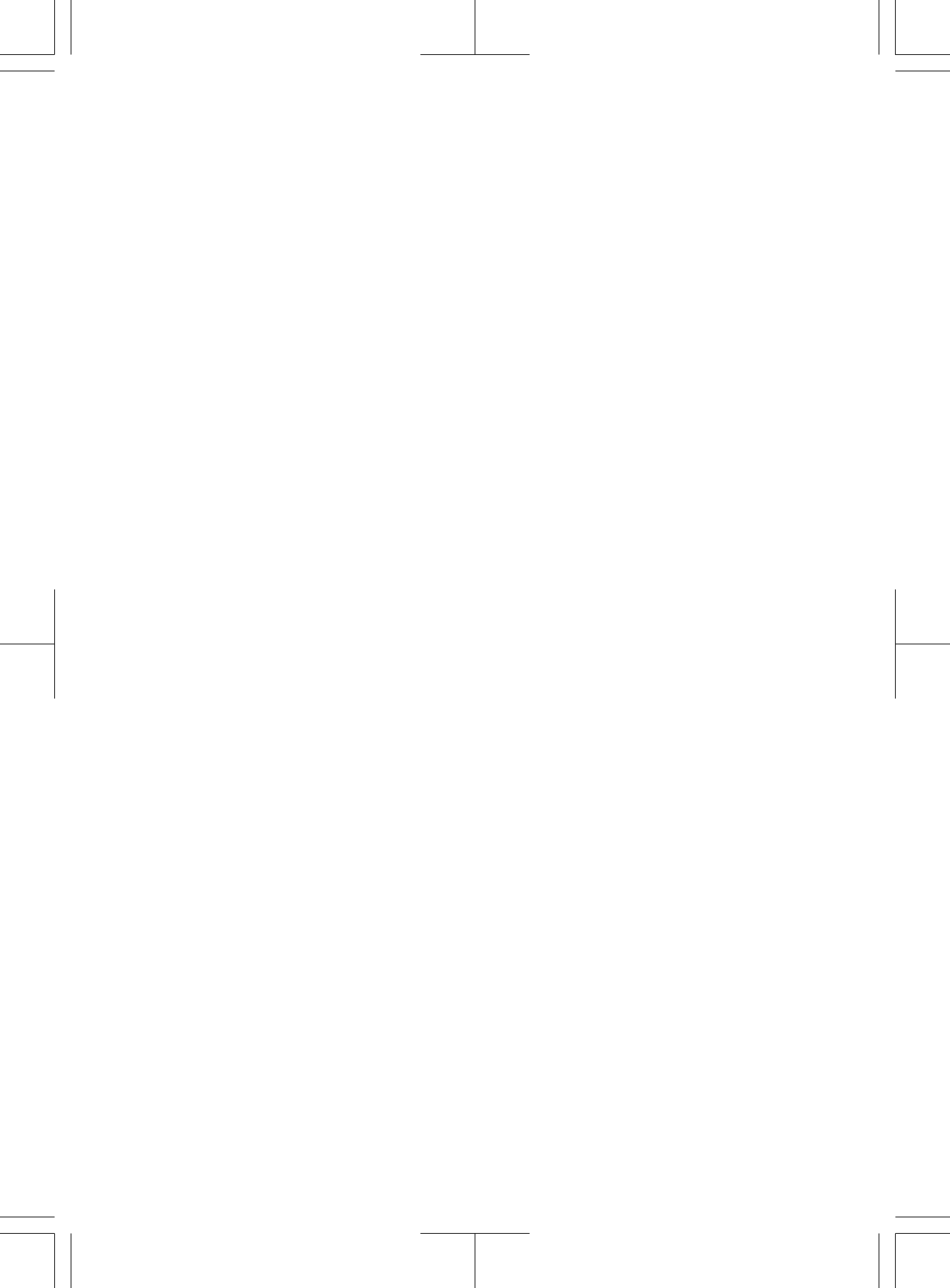
＜瀬戸キャンパス チャペル＞ 金曜日 13：00～13：30

チャペルや付設のキリスト教センターでは、チャペルアワーの他にも、学生活動や聖書研究会、宗教講演会、コンサートなど様々な行事を行っています。詳細はキリスト教センターの掲示板をご覧ください。

チャペルの開館時間は、原則、平日の「8時45分～16時45分」です。皆さんのための空間ですので、最低限のマナーは守りつつ、気軽に利用してください（大声でのおしゃべり、飲食はご遠慮ください。）

ピアノは練習のためであれば使用可能です。また、パイプオルガンの使用については、必ず事前にキリスト教センターにご相談ください。

チャペルの中で静かに自分と向き合い、語りかけ、そして内なる声に耳を傾けると、新しい導きをそこに見出したり、また何か発見があるかもしれません。ぜひ、チャペルに足を運んでみてくださいね。



チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(相木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなにに人？一問(はざま)から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィツシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？—神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎——神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと『敬神愛人』」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」
—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—(葛井 義憲)
- No.24. 「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教
キリスト教主義大学が大切にしたいこと—『敬神愛人』(西原 廉太)
- No.25. 「『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす」
(早瀬 和人)
- No.26. 「中山間地のソーシャルワーク」(越智 祐子)